

10月企画編集会議 センターの基本目標討論

「大きな物語を紡ぎだそう」

センターの目標は？

「人権意識の確立」が、私たちのセンターの目標であることはいまでもありません。それを国民的な課題とし定着させ、発展させるにはどうしたらよいのか？

この問いかけは、片時も、私たちの念頭を去ったことはありません。しかし、なかなか良いアイデアが浮かばないのも確かです。SMAPの「オンリーワン」が現在の若者たちにそれぞれの「個性」を磨くよう呼びかけ、若者たちの関心も「自分」の中に閉じこもりがちです。こうした傾向を乗り越えて、社会や世界の「歴史的課題」という「大きな物語」へと関心を振り向ける必要があるのではないかというのが、10月の企画編集会議での大きなテーマでした。

それを軸として、今後の活動を展開しよう、とくに来年度の啓発活動や学会活動の柱を

そこに据えようといったことも、理事会に諮った上で、追求することが確認されました。

岡映研、岡研究のポイントに迫る

「荊冠記に見る岡の歩み」と題して、9月12日、菅木一成さんが報告してくださいました。桂冠記第4部から第8部にいたる詳細をきわめた報告でした。

報告を通じて、戦中戦後の岡の寧日暇ない活動ぶりが改めて確認されました。戦後の岡山県での共産党建設から部落解放運動の組織に至るまで、非常に勢力的な活動でした。それらの実績は、岡が何よりも実に優れた組織者であったことを雄弁に物語っています。その際、岡が、その組織方法として「同族意識」に依拠したことを菅木さんは指摘されました。

マルクスの階級論と「同族意識論」とは、

岡の中でどのように結合していたのか—それが岡研究の一つのポイントであることが浮かび上がってきた研究会でした。

教育研究会

9月18日「三回の国連子どもの権利委員会の日本審査で何が問われたか」と題して、高梁城南高校の竹井久義先生が、報告してくださいました。22枚のレポート、4点の参考資料を付した大報告でした。

国連子どもの委員会の日本審査がすでに三回もなされていること、そこで、「子どもの貧困」「競争主義」が「懸念」され、子どもの意見が考慮されていないこと、子どもが「孤立感」に陥っていること、などが繰り返し指摘され、日本政府に対して改善を求めたのですが、日本政府は、これを事実上無視してきた経過が、詳しく報告されました。教育現場としては、これをどう受け止めたらいいか討論の中心となりました。